

IV 成果・検証・分析

1 つながる食育推進事業「食育に関するアンケート」の実施

(1) 目的

つながる食育推進事業モデル校の児童や保護者、教職員に対して、事業実施前後の食に関する意識や食習慣などの状況を把握するとともに、実施効果を評価・分析し、今後の食育推進の基礎資料とする。

(2) 調査対象

本事業の対象とした下松市内の児童・保護者及び教職員

(3) 調査時期

＜第1回＞：事業開始直後、各種取組の開始前（6月）

＜第2回＞：各取組の終了後、事業終了前（12月）

(4) 調査内容

調査用紙を用いて以下の内容について質問紙調査を行う。

＜児童調査（第1回、第2回）＞

①児童の食育に関する意識に関すること

ア 朝食を食べることへの価値

イ 共食をすることへの価値

ウ 栄養バランスを考えた食事をとることへの価値

エ 食事マナーを身に付けることへの価値

オ 伝統的な食文化や行事食を学ぶことへの価値

カ 衛生管理の重要性について学ぶことへの価値

②朝食を欠食する児童生徒の割合

③児童の共食の回数

④栄養バランスを考えた食事をとっている児童の割合

＜保護者、教職員調査（第2回）＞

①子供の食意識の変容

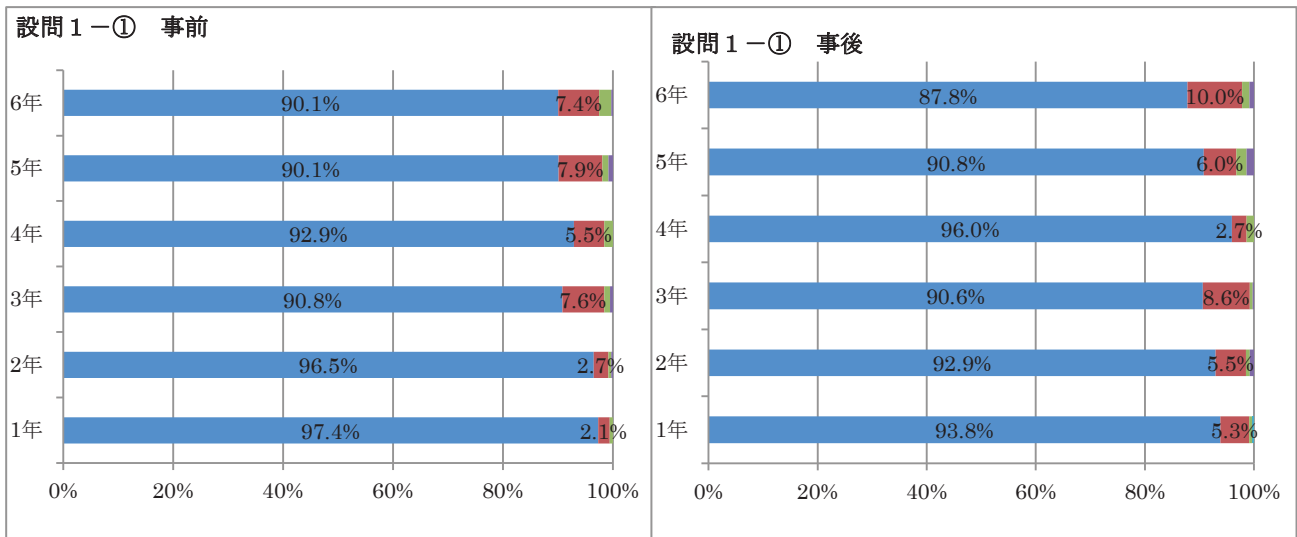
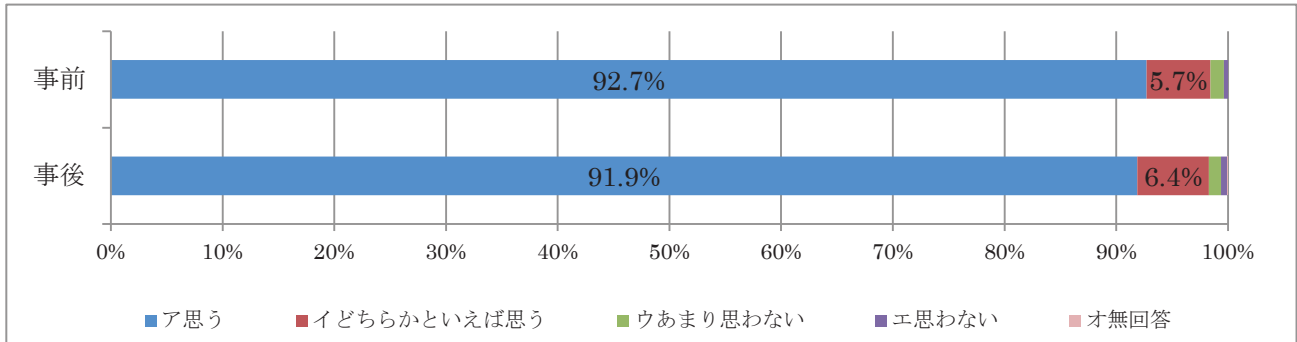
②子供の食習慣の変容

2 アンケート集計結果

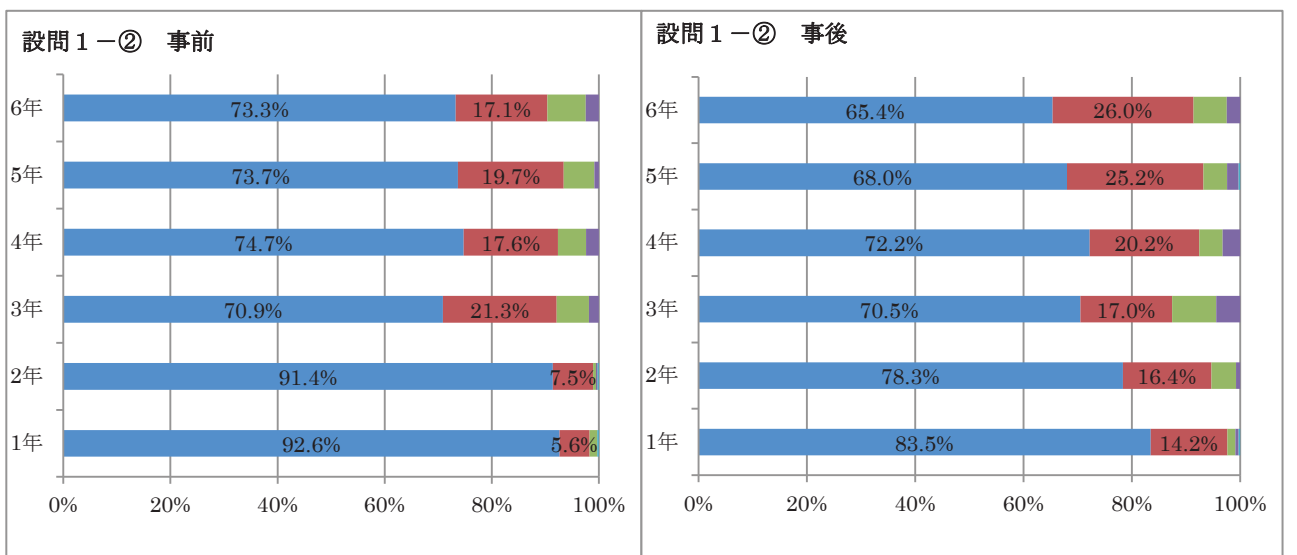
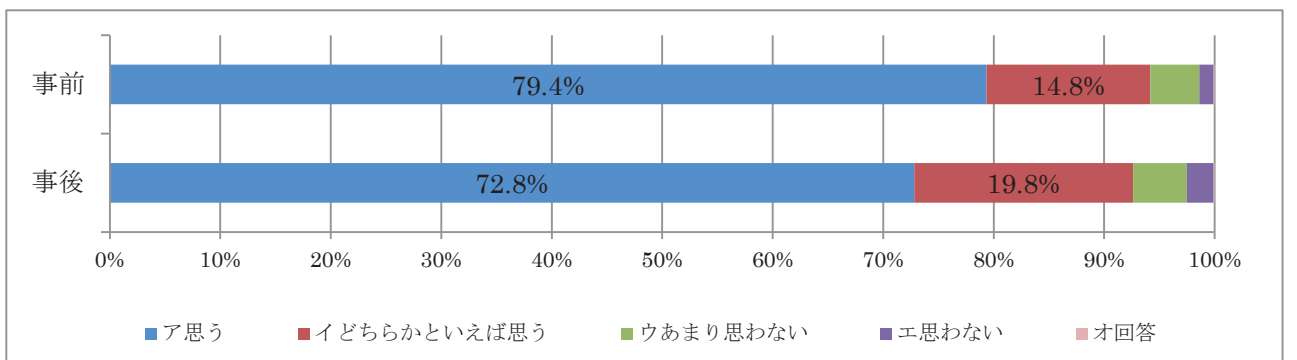
(1) 児童について（各学校回答数）

学校名	下松小学校	公集小学校	花岡小学校	合計（人）
事前	701	746	786	2233
事後	684	741	807	2232

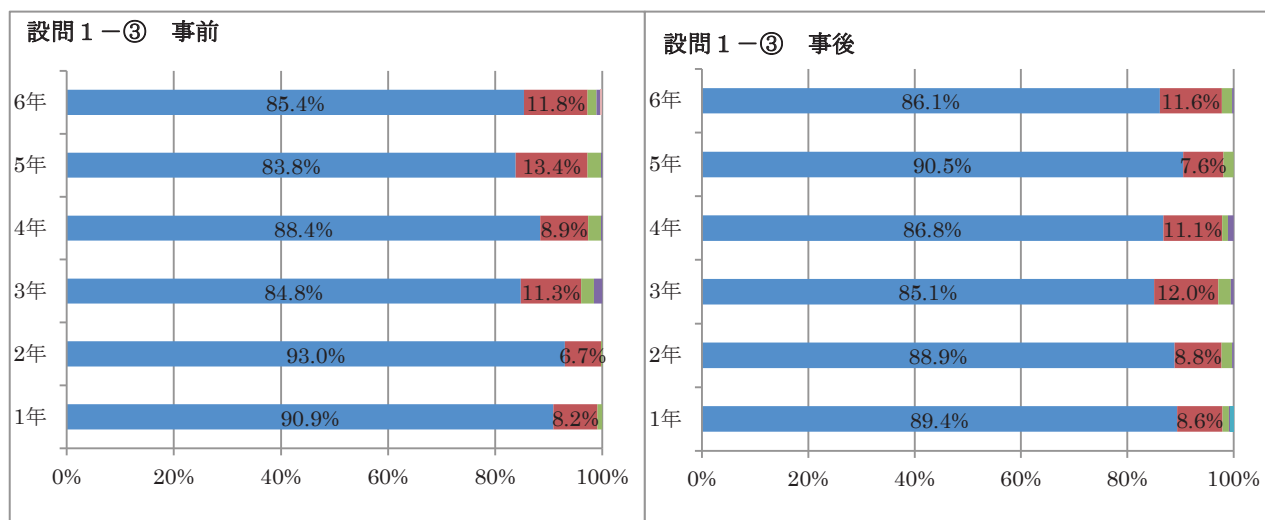
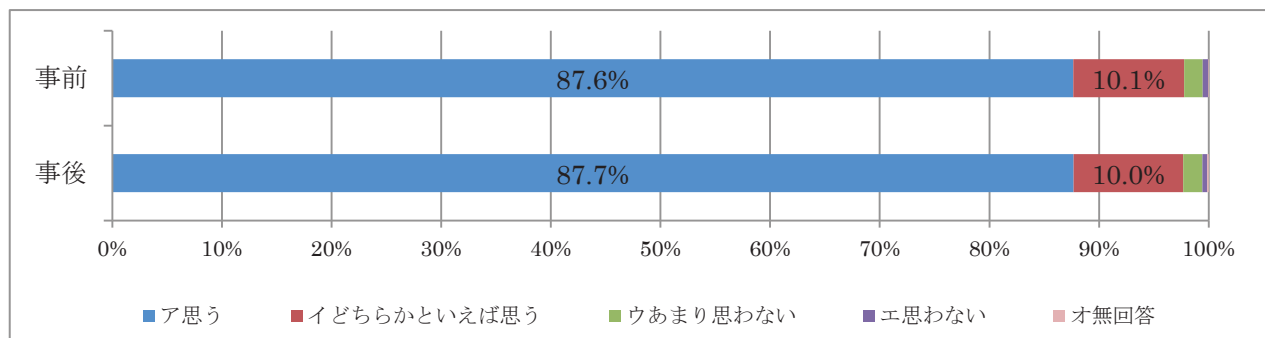
【設問 1-①】 朝ごはんを食べることは大切だと思いますか。



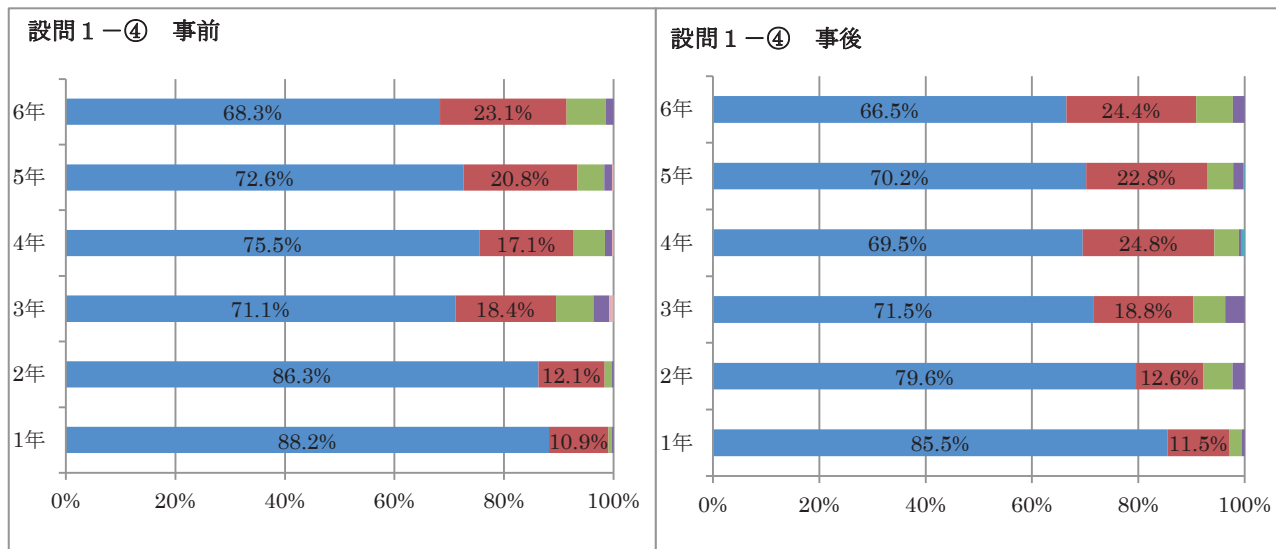
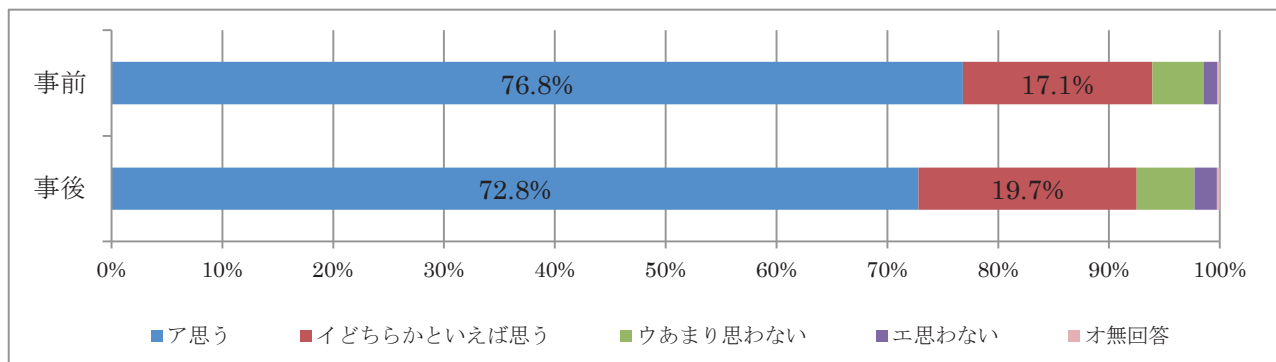
【設問 1-②】 家族などと一緒に食事をとることは大切だと思いますか。



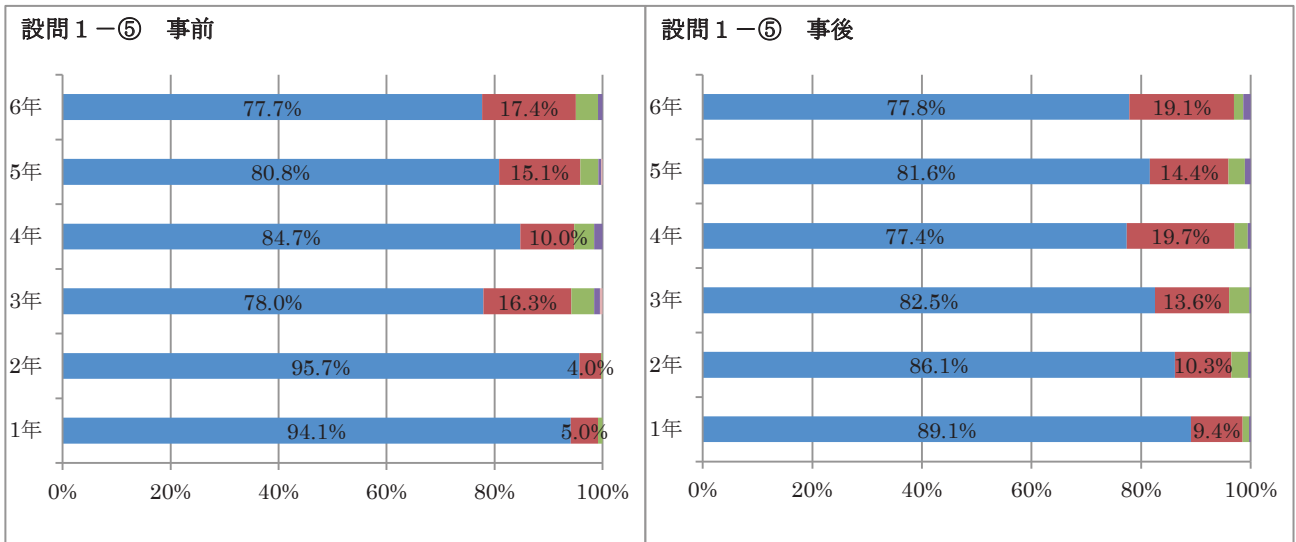
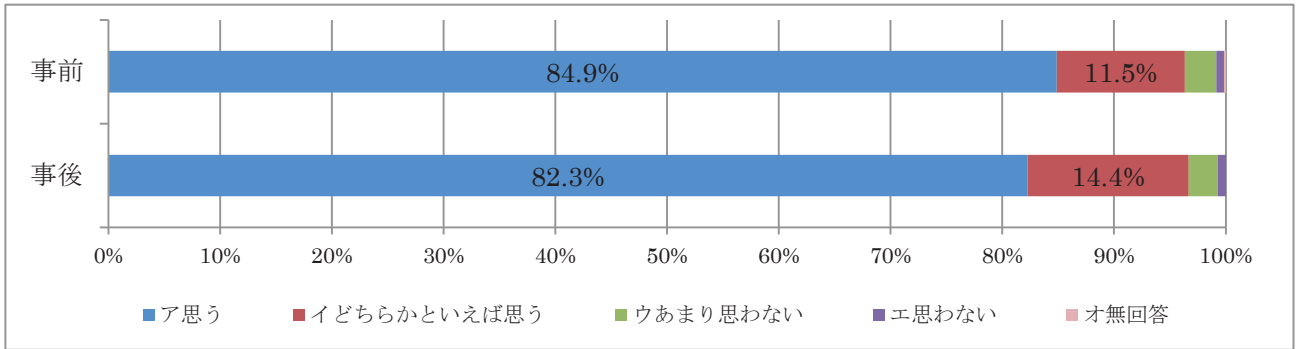
【設問1-③】栄養バランスを考えた食事をとることは大切だと思いますか。



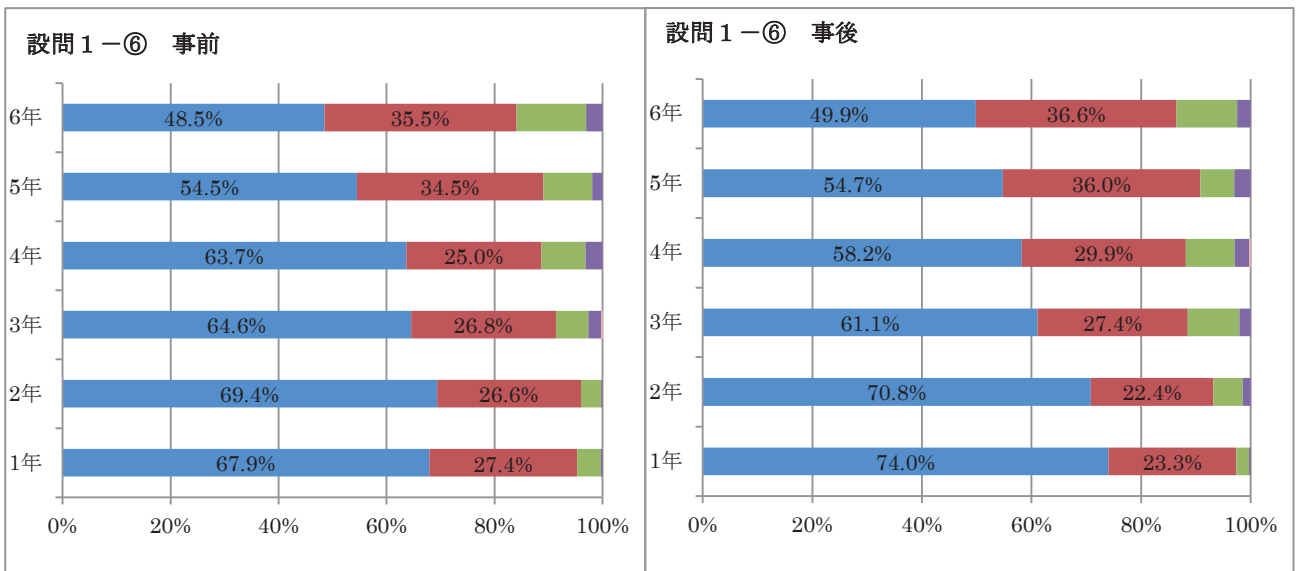
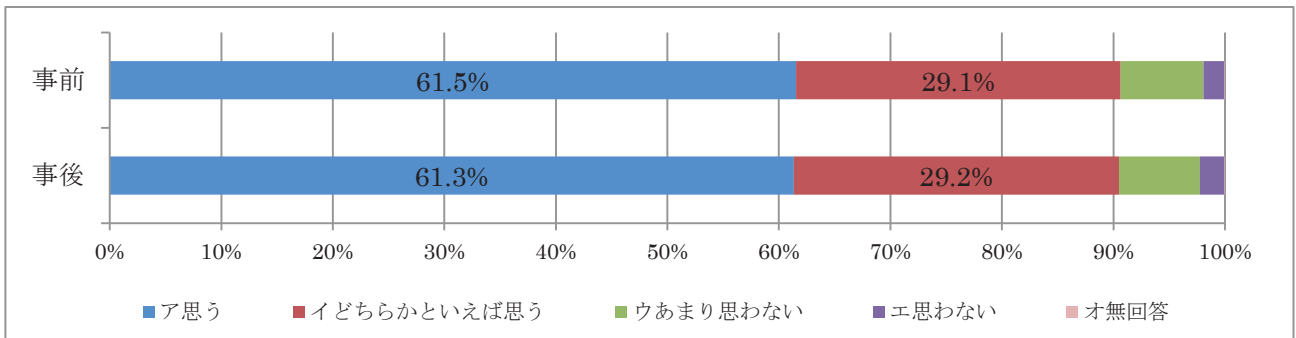
【設問1-④】ゆっくりよくかんで食べることは大切だと思いますか。



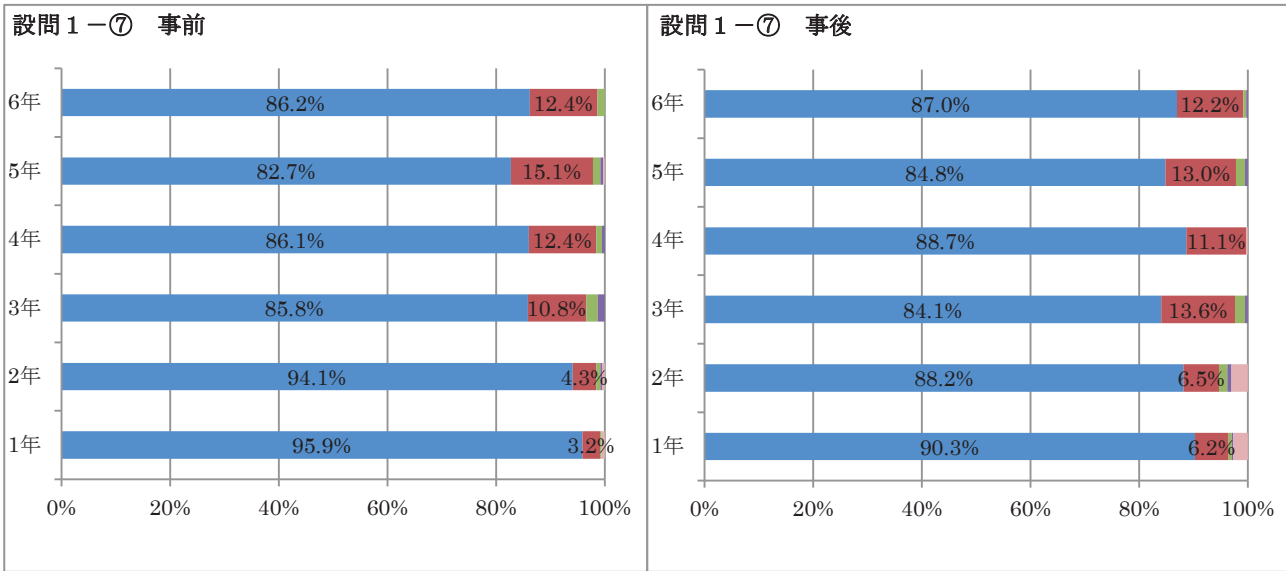
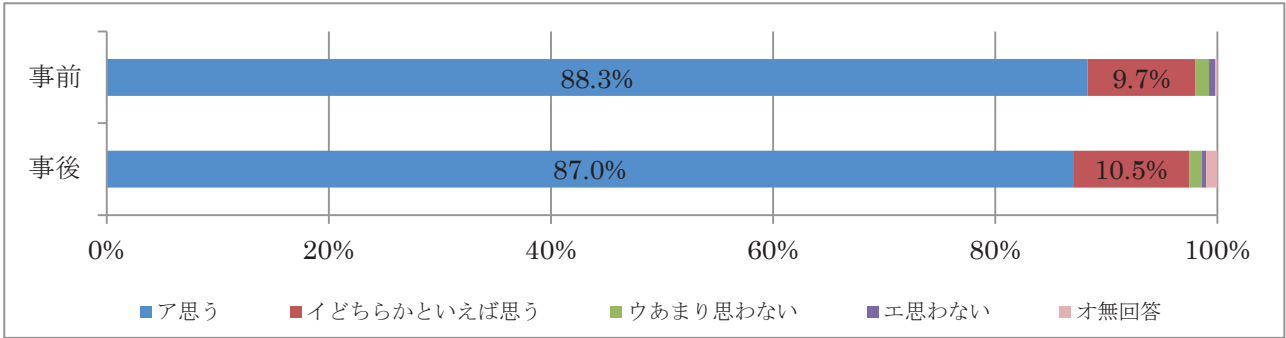
【設問 1-⑤】 食事マナーを身につけることは大切だと思いますか。



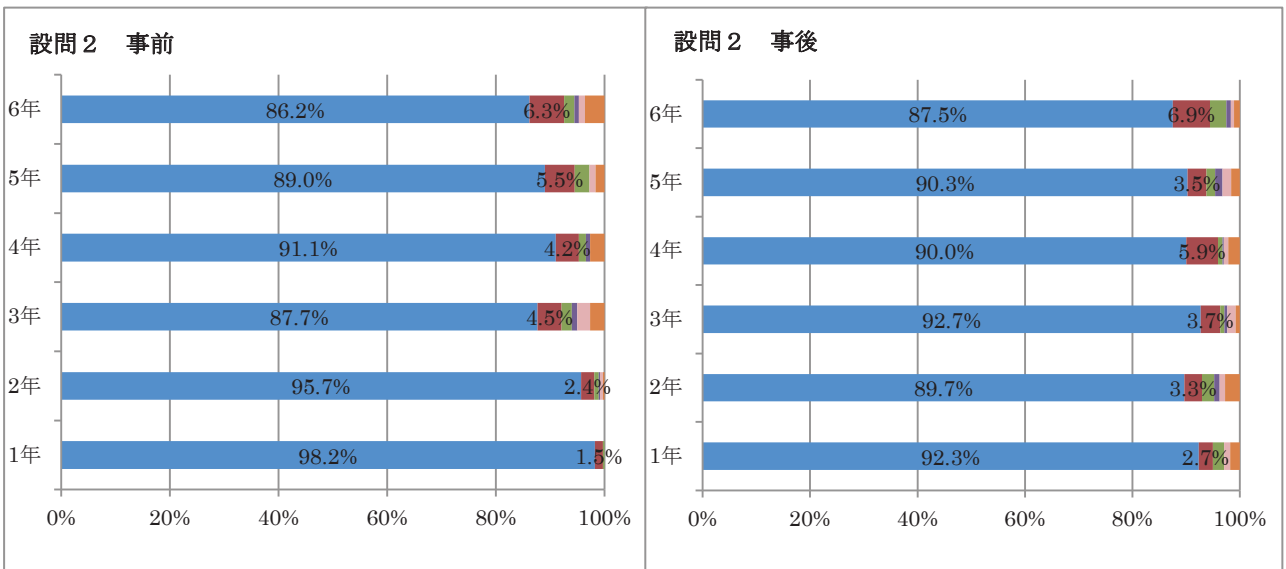
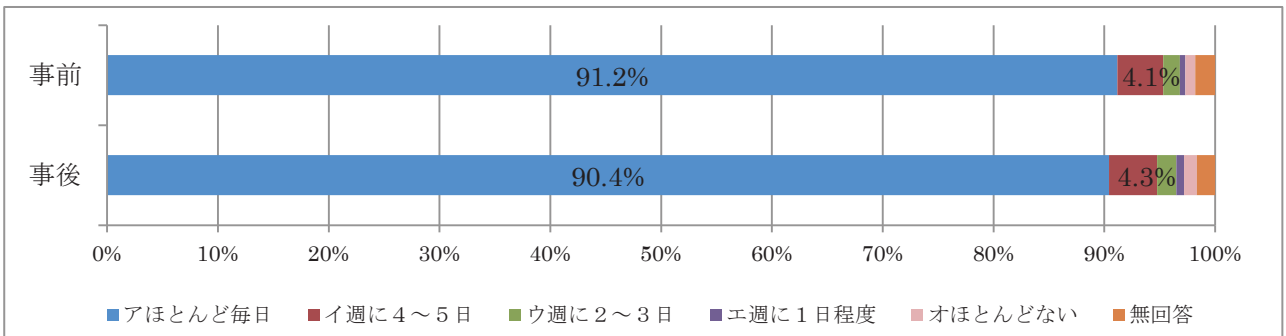
【設問 1-⑥】 伝統的な食文化や行事食を学ぶことは大切だと思いますか。



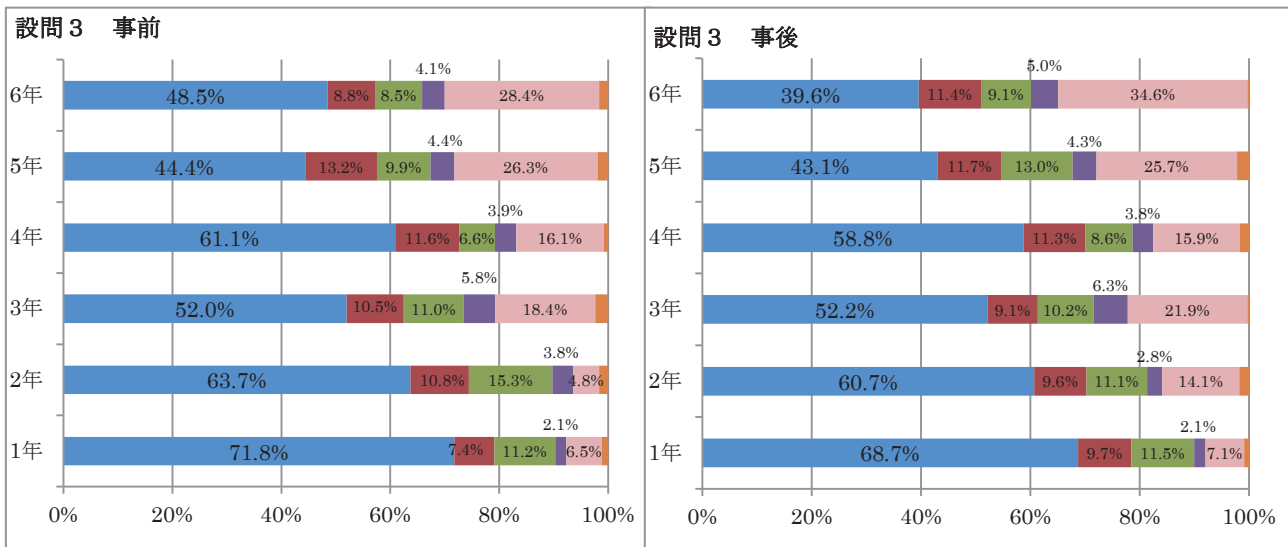
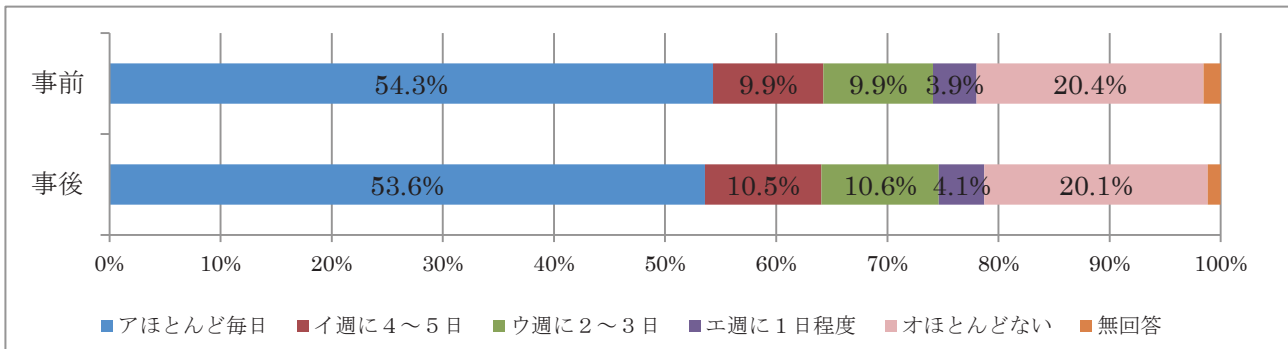
【設問1-⑦】 食事（給食）の際に衛生的な行動をとることは大切だと思いますか。



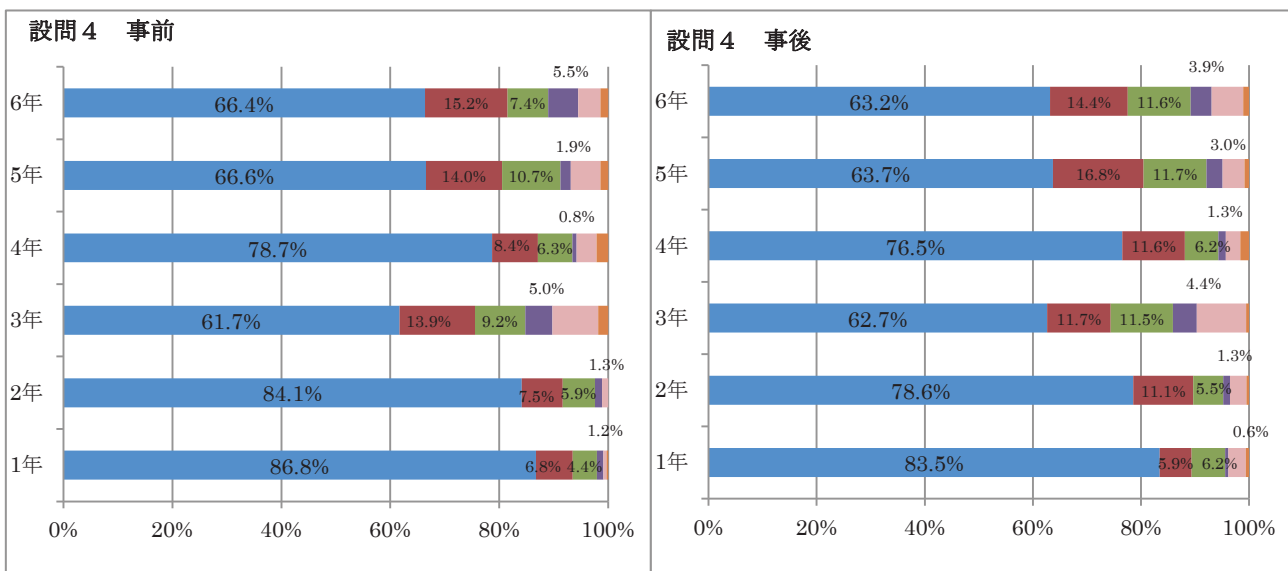
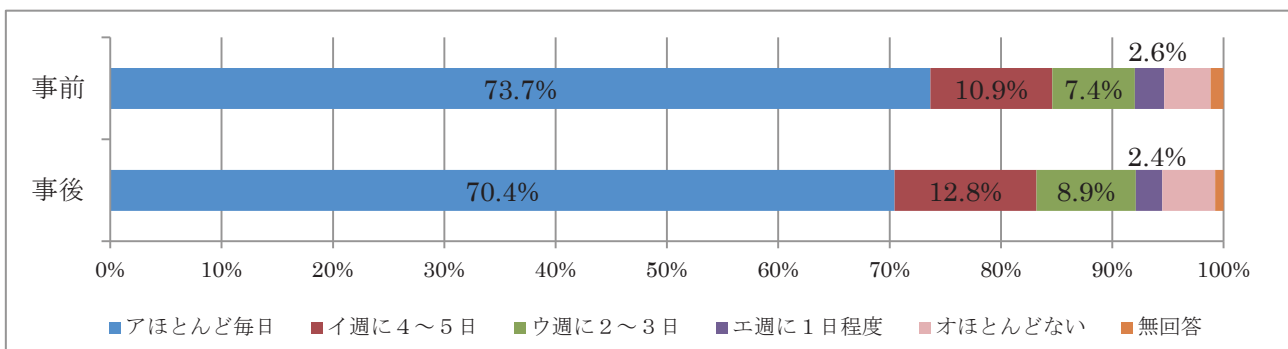
【設問2】 朝食を毎日食べていますか。



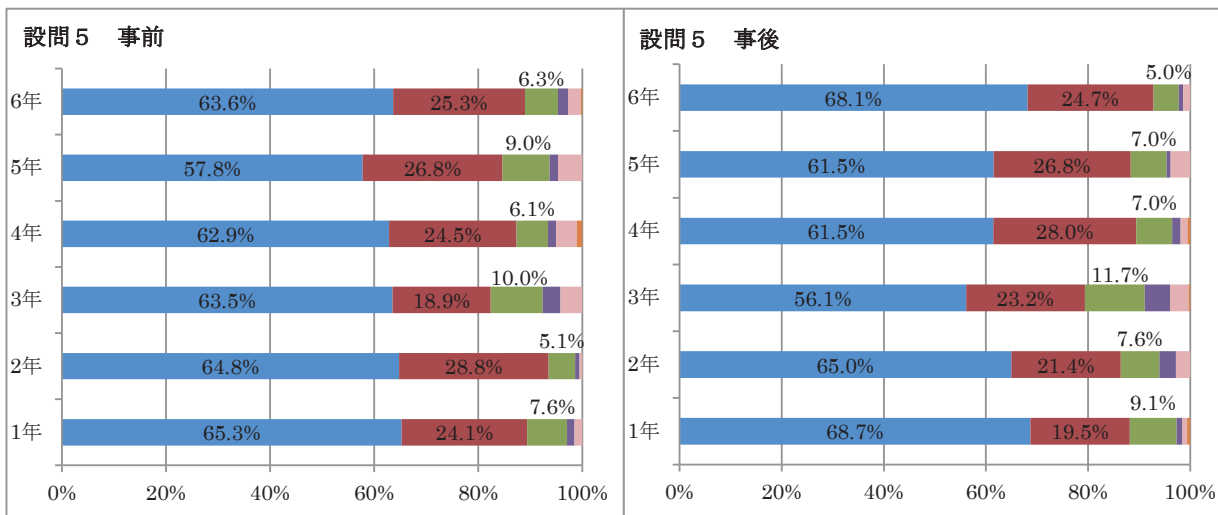
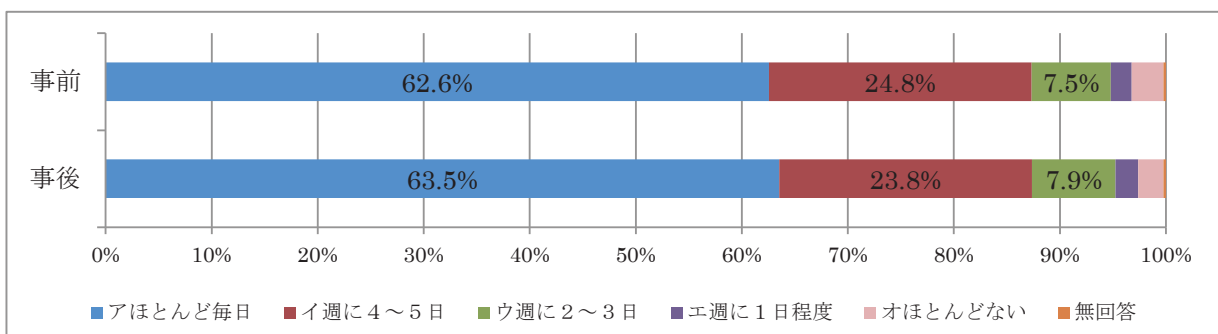
【設問3】 朝食を家族と一緒に食べることはどのくらいありますか。



【設問4】 夕食を家族と一緒に食べることはどのくらいありますか。



【設問5】主食、主菜、副菜を3つそろえて食べることが1日に2回以上ある（学校給食も1回に数えます。）のは、週に何日ありますか。



(2) 児童アンケートの分析

【児童の食育に関する意識に関すること】

全体的には、全ての設問において、事前事後ともに、「思う」又は「どちらかと言えば思う」（以下「望ましい回答」という。）と回答した児童の割合が9割を超えており、意識の高さが見られたものの、本事業実施前後での統計的な有意差は見られなかった。

事前調査の時点で望ましい回答の割合が高かったことは、これまでの食育への継続的な取組の成果であると認識している。

学年別では、朝食摂取の大切さについて、3、4、6年生の望ましい回答の割合が増加した。特に、4年生の「大切だと思う」と回答した児童の割合は、92.9%から96.0%に増加しており、意識の高まりがみられる。栄養バランスを考えた食事をとることの大切さについて及び食事のマナーを身につけることの大げさについては、3、4、5、6年生の望ましい回答の割合が増加しており、取組の成果が見られる。

【朝食を欠食する児童の割合】

全体的には、事前事後での統計的な有意差は見られなかったが、事前事後ともに、朝食をほとんど毎日摂取していると回答した児童の割合が9割を超えている。

学年別では、3年生の「ほとんど毎日」と回答した児童の割合は、87.7%から92.7%に増加し、「ほとんどない」と回答した児童の割合は、2.4%から1.6%に減少した。また、6年生では、「ほとんど毎日」と回答した児童の割合は、86.2%から87.5%に増加し、「ほとんどない」と回答した児童の割合は、1.1%から0.6%に減少した。

【児童の共食の回数】

全体的に、事前事後で、朝食、夕食ともに共食の回数が減少するという結果となった。

学年別にみても、ほとんどの学年で同様の結果であった。

これは、設問1-②の結果とリンクしており、家庭と連携した取組の一層の充実が今後の課題である。

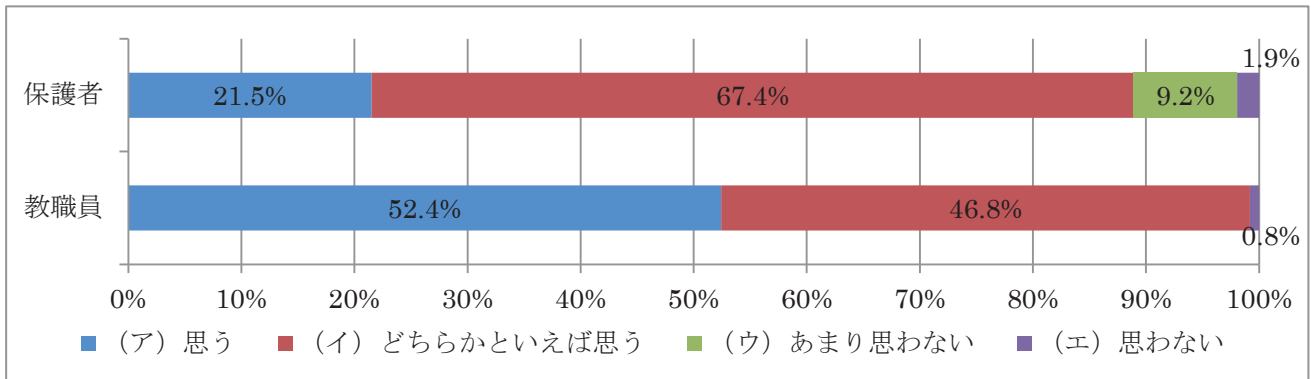
【栄養バランスを考えた食事をとっている児童の割合】

全体的には、事前事後での統計的な有意差は見られなかったが、学年別にみると、「ほとんど毎日」と回答した児童の割合が、1、2、5、6年において増加しており、「ほとんどない」と回答した児童の割合が、2年生を除く全ての学年で減少している。特に、5、6年生については設問1-③の結果とリンクしており、取組の成果が見られる。

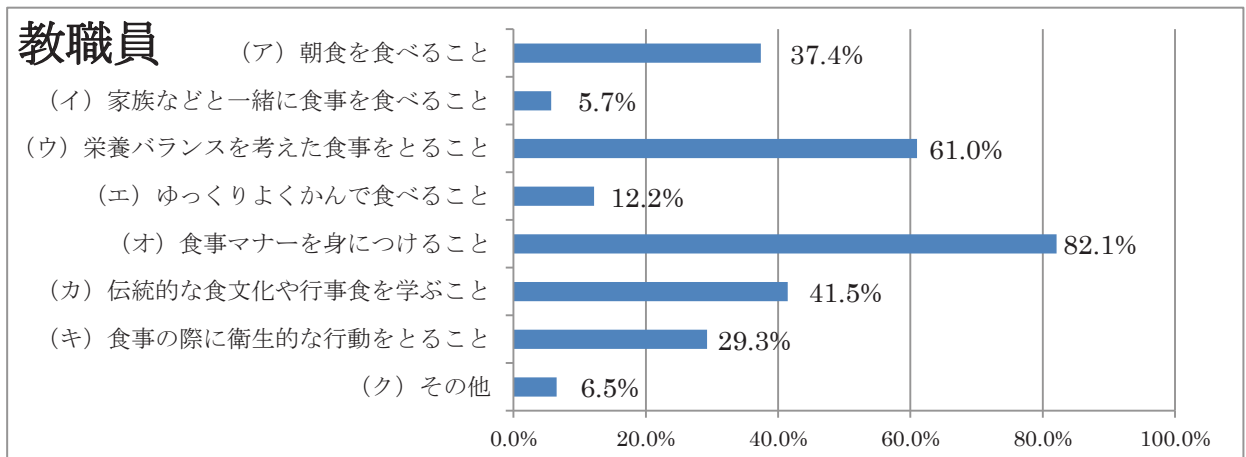
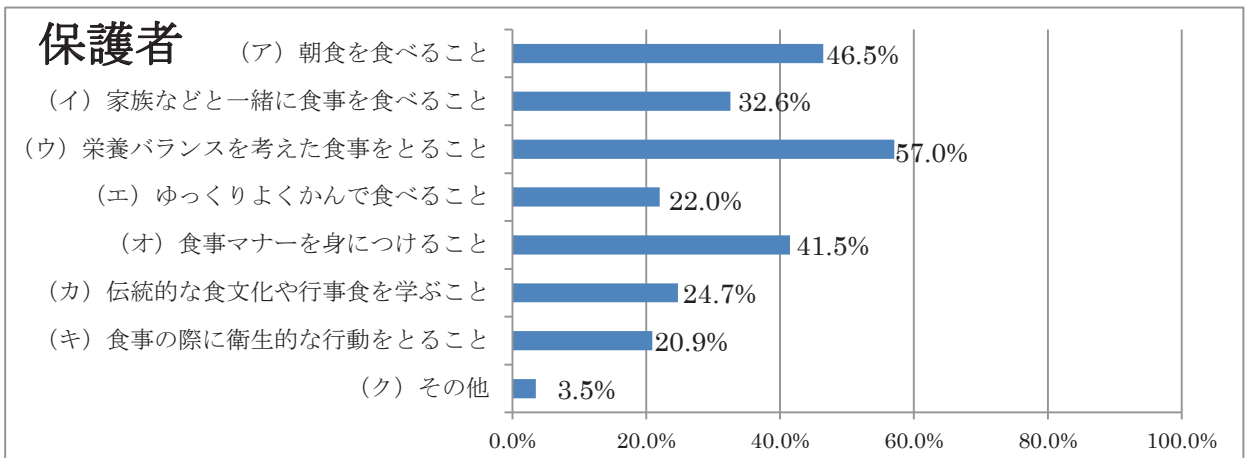
(3) 保護者・教職員について (各学校回答数)

学校名	下松小学校	公集小学校	花岡小学校	合計 (人)
保護者	566	661	742	1969
教職員	45	33	46	124

【設問1-①】今年度の学校における食育の取組を通してお子様(児童)の食に関する意識は高まりましたか。



【設問1-②】1-①で(ア)(イ)と回答した人
食に関する意識のうち、何が高まりましたか。



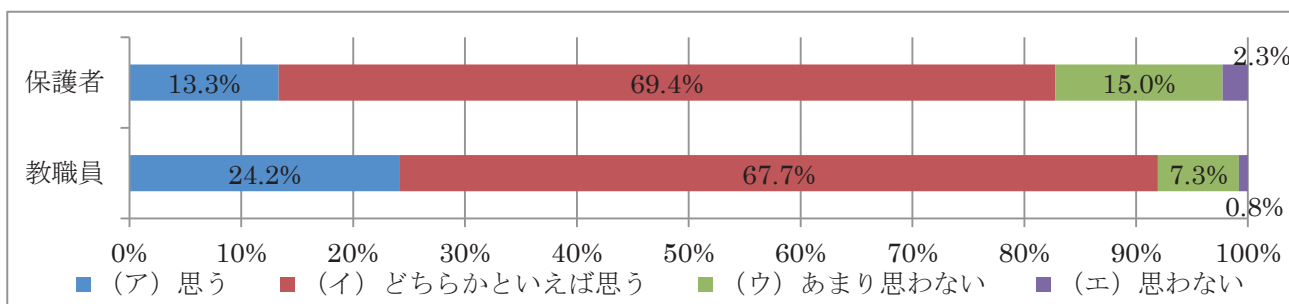
【設問 1－③】 1－①で (ウ) (エ) と回答した人

食に関する意識が高まらなかった理由はなんだと思いますか。【自由記述】

<保護者意見>

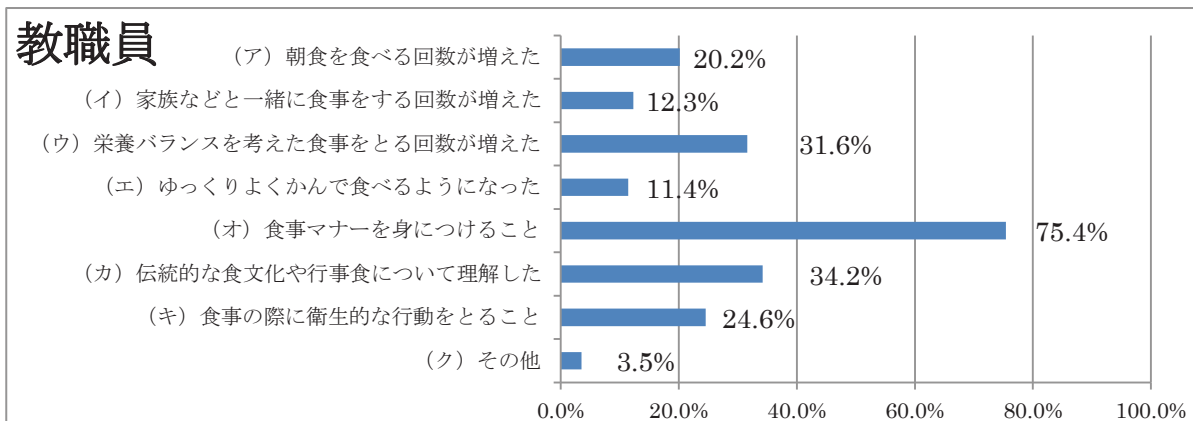
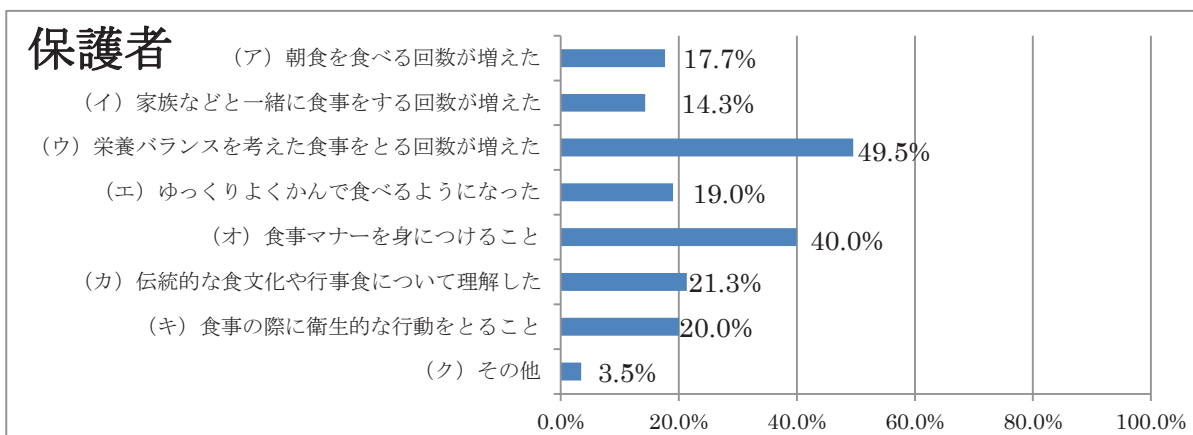
- ・本来なら家庭ですること。
- ・本人に関心がなく、理解も難しいと思う。
- ・家庭の問題（忙しい、経済的に無理、家族一緒にの食事は難しい）で取り組めない。
- ・家庭で子どもが食の話をしていない。
- ・指導されてもすぐに忘れていく。
- ・家庭で教えていることで、学校の取組を通してできるようになったわけではない。
- ・元々、食に対する意識は高く、変化を感じない。

【設問 2－①】 今年度の学校における食育の取組を通してお子様（児童）の食習慣は変わりましたか。



【設問 2－②】 2－①で (ア) (イ) と回答した人

食習慣のうち、何が改善されましたか。【複数回答可】



【設問2-③】 1-①で(ウ)(エ)と回答した人

食習慣が改善されなかった理由はなんだと思いますか。【自由に記述】

<保護者>

- ・ 前から気を付けているので、改善の必要がない。
- ・ 食育そのものに興味がない。
- ・ 生活習慣ができていないので、無理。
- ・ 箸や食器の持ち方ができていない。
- ・ 急に身に付くものではない。本人のやる気にも影響される。

<教職員>

- ・ 家庭の協力が得られづらいと感じる。
- ・ 家庭環境が改善されない
- ・ 家庭と学校の連携。家庭の食習慣を変えることは難しい。
- ・ 学校の給食の様子だけでは、よくわからない部分がある。食事マナーを意識する姿は見られるようになったが「よくなった」と言えるようになるには、継続的な指導が必要。

【設問3】今年度の食育に関する取組について、成果や課題、感想などがありましたら自由に記入してください。

<保護者>

朝食について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朝食に野菜をとるようになった。 ・ 以前から朝食をとっていたが、更に朝食をとることの大切さを意識できるようになった。 ・ 朝食に野菜を出すことが少なかったが、取組によって意識し、野菜を取り入れるようになった。 ・ 野菜を進んで食べるようになりつつある。 ・ 朝食をバランスよく食べる習慣が身に付いた。 ・ 子どもから、「朝ごはんにもっと野菜が食べたい」と言われ、本人が朝の野菜の大切さがわかったと思う。 ・ 朝食に野菜や果物をよく食べるようになった。
食事マナーについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭での食事でお皿の配置など、自ら直して置いたりしているのが、食育での関心が高まっていると感じた。 ・ 食べる時のマナー（姿勢、左手をお皿に添える等）もきちんとしてほしい。 ・ 授業で箸の使い方を学び、とても上手に箸を使えるようになった。 ・ 食器の並べ方、箸の持ち方など、自ら気を付けるようになった。 ・ 参観日に箸の持ち方を学習し、家で弟に教える姿が微笑ましかった。 ・ よい姿勢で食事をするようになったり、箸の持ち方を気にしたりしている。 ・ 手が小さく箸を上手に持てず、すぐに握り箸になってしまいがちで、その都度、正していかないと習慣にならないので、常に気を配りたい。 ・ 自分で箸の持ち方、お茶碗の持ち方が違うことに気づいたり、正しい持ち方に直したり、マナーに気を付けようという意識はできてきたと思う。
郷土料理・行事食について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 季節や各地域の産物のメニューを楽しみにしている。 ・ 郷土料理のクッキング体験などがあればよい。 ・ 郷土料理を知ることができ、一緒に作ってみたいと思った。 ・ 郷土料理が給食に出た日は、家で、郷土料理の内容や味の話をしてくれる。 ・ 「けんちょう」等、家ではなかなか出せなくなった献立が給食で出され、知ることができるのは貴重な経験である。 ・ 献立表を見るのが楽しみで、伝統的な食事のメニューや季節ごとの行事に食べる料理について興味をもっている。 ・ 調理実習を通して、旬なものを教えてもらっている。
栄養について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 栄養バランスを考えて食事をさせたいという意識は高まった。 ・ 食品の栄養素を意識して、赤・黄・緑のすべてがあるか気にして食べる様子が見られるようになった。 ・ 好き嫌いが少なくなり、量もたくさん食べるようになった。

その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ レシピなど役にたちました。 ・ 給食を作ってくくださる方への感謝の気持ちが大きくなっていると感じる。 ・ 家庭と一緒に食事をする回数が増えたり、衛生や食事マナーに気を付けて食事したり、季節の食材を使った料理に触れる機会が増えた。 ・ 家での食卓を囲む時、食育について学校で学んだことを話してくれる。学校でよく、話を聞き、理解しているのだと感じた。 ・ 学校での取組で子どもが学んだ知識や感じた食についての大切さを毎日の食の中につなげるためには、家庭での食育が大事だと反省した。家庭でできる食育、一緒に食事を作ったり、栄養バランスをきちんと考えたり、食の大切さをもっと伝えていかなければいけないと感じた。 ・ 給食委員会の取組がよかった。 ・ 弁当の日の取組がよかった。 ・ 親子料理や食育講演会がよかった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食育講演会や試食会などの時間の設定を考慮してほしい。 ・ どのような取組をしたのか示してからアンケートをとるべき。 ・ 自分だけかもしれないが、学校での食育の取組が具体的にどのようなものかわからない。 ・ 無理にみんな同じ量を食べるのではなく、自分の無理なく食べられる量に自分で調整して食べてほしい。 ・ 繰り返すことが大切なので、家庭と学校が同じように育てていくことが近道なのだと思う。 ・ 食育に関する取組についてプリント等で内容はわかったが、具体的にそれが、生活の中で反映されていない。 ・ 本来なら家庭でしつけるべきところをととても熱心に取り組んでもらっている。 ・ 学校で行った「食育に関する取組」の内容をもっと詳しく教えてほしい。実際にどのようなことがその取組なのかがよくわからない。 ・ 「食育ってなに？」と聞かれたくらいなので、残念ながらあまり成果が出ていないように感じる。 ・ ノーメディアデーのように家族みんなが心がけて食事をする日があればよい。 ・ 食事マナーについて、しないといけないこととしてはいけないことの理由も合わせて学んでもらえたらよい。

<教職員>

朝食について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「朝食に野菜をとる」事を意識している子どもが増えてきた。 ・ 朝食に少しでも野菜をとろうと試みる保護者が増えた。 ・ 「朝、野菜を食べたらシールをはろう」の取組は、子どもたちの意識化、意欲づけになったと思う。 ・ 各家庭それぞれだとは思いますが、どんな朝食を食べているか気になる。時短できる朝ごはんレシピ集みたいなものがあれば参考になると思った。
食事マナーについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食事マナーが身に付いていない児童が多いので学校全体で取り組み指導したことが意識づけによかった。 ・ 食事マナーの改善をどのように指導するかが課題（楽しく食べることを損なわないように習慣づける）。 ・ 食事マナーの中でも今年度は、箸・食器の持ち方、並べ方に絞ったことで、指導がしやすかった。 ・ 給食委員の発表が食事マナーについて考えるよい機会となった。
郷土料理・行事食について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 郷土料理や行事食など、学習と関連して子どもたちがとても興味を持って食事をしてきた。給食が地域の伝統料理を伝える大きな役割を担っている。
栄養について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 残食量の減少は、子どもたちが好き嫌いをせず、栄養バランスを考えた食事をとろうとする意識が出てきたからだと思う。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校での取組を家庭に知らせていくことで各家庭の意識が広がってきている。 ・ 全校体制で取り組んだことにより教職員の意識が高まった。 ・ 学校での取組が家庭や子どもたちに浸透してきている。継続して取り組むことで、さらに成果が現れる。 ・ 学校保健安全委員会で食育に関する内容（給食試食会含む）を取り入れるとともに、実施内容を保健だより等で紹介したことによって保護者や教職員の意識が高まった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 栄養教諭、担任、食育担当教諭の連携がすばらしく、全校的な取組が推進され、児童生徒、保護者、教職員の意識の改善が見られた。 ・ 栄養教諭や給食委員会の活動（お昼の放送や呼びかけ）、学級活動などにより、児童への啓発は充分行えたと感じる。成果も上がったように思う。 ・ 市内一斉に食育について取り組めたことがよかったと思う。 ・ 「お弁当の日」「食育講演会」で児童は、食の大切さを実感し、料理を作ることに興味を持っていた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭の意識を変え、いかに巻き込んでいくかが課題。 ・ 食育に関する取組を行うための時間の確保が難しい。 ・ 食育に関心のない担任に、食の大切さをどのように伝えるかが課題。 ・ 食と健康、食と体づくり、食と学習活動等の相関関係を意識し、今後、家庭・地域とのつながりをさらに深めていくことが大切である。 ・ 食育に関する意識が高まってきている。それぞれが連携し、組織で取り組んでいけるとより効果もあがると思う。 ・ 伝え続けることで、意識が変わってきた。すぐには変わることは難しいが、継続的に取り組みたい。 ・ 全校体制による食育の推進は、学校教育の基盤として、全市的に定着させる必要がある。 ・ 担任と連携して取り組むことで効果があがるので、年間計画に位置付けて今後も取り組んでいけるようにしたい。 ・ 学校からの情報提供や試食会、料理教室等を通して、子どもや保護者の関心が高まってきていると感じる。ただし、一部の子どもや保護者の関心の高まりをどのように全体へと波及させていくかが、課題である。 ・ きちんと食事をしたり、食事マナーを身に付けたりしている家庭もあるが、できていない家庭もあり、学校教育での食育の大切さを実感している。

(4) 保護者・教職員アンケートの分析

【児童の食育に関する意識に関すること】

食に関する意識が高まったか、という設問では、「思う」または、「どちらかと言えば思う」（以下「望ましい回答」という。）と回答した者の割合が保護者 88.9%、教職員 99.2%という結果で、児童の意識の高まりが見られたと感じる。

望ましい回答のうち、特に高まったと思われるという意見の多い項目の（ア）朝食を食べること、（ウ）栄養バランスを考えた食事をとること、（オ）食事マナーを身につけること、（カ）伝統的な食文化や行事食を学ぶことについては、今年度、下松市で取り組んできた、「朝食摂取率の向上・内容の充実」「食事マナーの定着」「地場産食材・郷土料理への理解」についての取組の成果であると思われる。

【食習慣の改善に関すること】

食習慣の改善については、望ましい回答をした者の割合が保護者 82.7%、教職員 91.9%という結果であった。食習慣のうち改善されたと思われるという意見の多い項目は、（ウ）栄養バランスを考えた食事をとること、（オ）食事マナーを身につけること、（カ）伝統的な食文化や行事食については、今年度、下松市で取り組んできた、「朝食摂取率の向上・内容の充実」「食事マナーの定着」「地場産食材・郷土料理への理解」についての取組の成果が見られた。（ア）朝食を食べる回数が増えた。については、改善が見られたという意見は少ないが、これは、児童アンケートの設問2での「毎日朝食を食べていますか」という項目で、90%以上の児童が朝食を食べており、もともと高い割合のためあまり変化が見られないことによると思われる。

3 成果と課題

下松市では、「つながる食育推進事業」の事業名を「食育プロジェクト K ～健康で快適な食生活・食文化の継承を図る地域の力～」とし、「教職員、保護者、食生活改善推進協議会等、子どもの成長に関わる全ての人や組織が、子どもの食の課題を共有し、課題解決に向けて様々な取組を実施し、関連付けを図ることで、子どもの食に対する意識が高まり、健康で快適な食生活を送ろうとする実践意欲や地域の食文化を大切にしようとする心が育まれるであろう。」と研究仮説を設定し、取り組んできた。

【「食育プロジェクト K」の目標についての検証】

○健康な食生活

山口県の児童生徒の朝食摂取率については、ここ数年減少傾向にある。特に小学3年生の朝食摂取率は他学年と比べてよくない状況が続いている。今回の事業で得られたアンケート結果（設問2）を分析すると低学年の朝食摂取率が半年間で顕著に悪くなっていることが見えてきた。小学校に入学して、保護者も子どもも望ましい生活習慣をつくらうと努力をするのが一般的であろうが、低学年のうちには保護者の負担が大きく、年度初めに意識高く生活を送っていたものの、夏休みを終えたところから、気持ちのゆるみや生活の疲れから家族全体の生活習慣に変化が出てくる可能性はある。特に冬になると日の出が遅く、気温も低いことから、大人も子どももなかなか寝床から出られないこともあるのではないだろうか。

小学3年生になり、子どもが自分の力でできることが増えると指導の効果も大きく出ており、高学年においても、ほぼ同様の結果であった。低学年のうちに望ましい食習慣について、発達段階に応じた内容をある程度理解させておけば、中学年以降の実践による影響を与えるものと推察できる。今後の課題としては、低学年の保護者に対する支援の仕方を考える必要がある。

また、設問5の結果を見ると、中学年以降、食事の摂取内容に改善が見られるので、現在行っている食に関する指導は中学年以降に有効に機能しているといえる。6年生で行うことが多い「給食の献立を考える授業」や「弁当を自分で作る体験」等は特に有効な取組であると考えられる。

○快適な食生活

設問1-⑤の結果を見ると、食生活改善推進協議会の協力を得て、モデル校の小学3年生に対して行った食事マナーの指導については、有効であったといえる。逆に気になるのは小学2年生の結果でどのモデル校においても顕著に悪くなっている。食事マナーが身に付いているかどうかは、家庭においても大きな影響を与えていると考えられる。食に対する姿勢の変化は食事摂取の状況にも影響を与えるであろう。

多様な価値が認められるようになった現代社会において、子どもたちに「正しい」マナーを身に付けさせるためには、「正しい」とは何かをよく理解させると同時に、子どもに関わるすべての人が共通の認識を持つ必要がある。

○継承する食文化

食文化の継承については、学校給食での郷土料理や行事食の提供、社会科での郷土料理の学習、地場産食材の学習、親子料理教室等で意識の向上を図ってきた。しかしながら、設問1-⑥のアンケートでは、全体的には意識の向上が顕著に見られなかった。食文化の継承については、地域や家庭に根差したものであることから、地域や家庭と連携し、今後ともこの取組を継続させていく必要がある。

【「食育プロジェクト K」の取組の成果】

- ・ 「つながる食育推進事業」の委託を受けたことで、学校を中心として、教職員、保護者・家庭、地域、その他の関係機関が連携し、取り組んできたことにより、児童の食に関する意識の向上が見られた。
- ・ 特に高学年については、学級活動や家庭科、委員会活動において食育に取り組むことで学びが広がり、食に関する一層の意識の向上が見られた。
- ・ 保護者については、つながる食育の取組の啓発をすることによって、食育についての関心を高めることができた。また、88.9%の保護者が、子どもの食に関する意識の向上が見られたと感じており、取組の成果を実感していると感じた。
- ・ 教職員については、栄養教諭を中心として、学校全体で共通理解を図り、食育を推進していくことで、給食指導だけでなく、全ての教科、学級活動において、食育に関連付け、取り組むことができた。また、99.2%の教職員が、子どもの食に関する意識の向上が見られたと感じており、学校での取組の成果を実感していると感じた。
- ・ 地域の食生活改善推進員や生産者等が学校での食育の取組に関わることで、児童や保護者の興味や理解を深めることができた。

【「食育プロジェクト K」の取組の課題】

- ・ つながる食育推進事業に取り組んできたことで、食に関する意識も高まってきたように思えるが、実際の家庭での食生活については、事前事後のアンケートからは、あまり変容が見られなかった。特に低学年は、食に関する意識の変容が見られず、朝食摂取、栄養のバランスについても、アンケートの事前と事後で望ましい回答が減少しており、家庭での協力が不可欠であることがわかった。
- ・ 食育に関する実践や啓発活動を実施し、その時の児童の姿には、食に関する理解や意識の向上が見られているが、ある学級では、指導した数日後には、姿勢が悪くなっていたなど、定着を図ることは難しく、継続して取り組む必要がある。
- ・ 学校全体で食育に取り組むためには、教職員の共通認識や教育活動での時間の確保が難しく、今後、食育を進めていくうえで、教職員の食に関する意識の向上をさらに図る必要がある。

【今後の食育の推進について】

今年度、下松市全体で食育について、学校・家庭・地域・その他関係機関が連携を図りながら取り組んできた。一人ひとりの児童生徒が、「健康で快適な食生活、食文化の継承を図る」ことができ、また、食に関する正しい知識や望ましい食習慣を身に付け、自ら健康管理ができるようにするためには、保護者・家庭での協力が必要である。

そのためにも、今までの取組を継続し、児童生徒、保護者・家庭、教職員の食育についての意識が向上するように繰り返し取り組むことが大切である。

児童生徒に関わるすべての人々が、より一層つながり、それぞれの立場から食育の推進を図っていくことができるよう、食の専門家である栄養教諭を中心として、食育に取り組んでいきたい。